

# 「左顎の痛み 顎関節症」

ライフカイロプラクティックセンター

心身条件反射療法士 国島 勉

## 【主訴】

硬いものを噛んだ時に顎がガクツとなり、その後だんだんと左顎の痛みが酷くなる。

## 【病歴】

今回の主訴は、直近の出来事である硬いものを噛んだ後からの左顎の痛みであるが、20年位前に自転車事故で左顔面を強打、左顔面麻痺になったことあり。以降、主訴発生前も、顎の痛みに伴う開きの悪さや食事時などのカクツという感覚はずつと感じていた。

## 【問診】

自転車事故から長年痛めていた左顎なので元々弱から仕方ないこともあるけれど、今回の痛みで食事を摂るのも自由なので何とかしたいとの訴え。

## 【施術】

・1回目  
開けるのも噛むのも痛い。

開口値 (MOM) 指1本カクツという。(音、感覚) 施術は、主訴の硬いものを噛んだ時の衝撃以降酷くなったという事からまずハー下面 (肉体面) から神経関節機能障害の改善のためアクトイベータメソッドにて行う。ペーシック+TMJ (側頭下顎関節) をプロトコルに沿い施術。(以降アクトイベータはAM)  
MOM 指2本。開け閉めもスムーズになる。

・2回目  
カクツという感覚と痛みはあるが、だいぶ調子よく食べるのも楽になった。  
MOM 指3本。AMにて

神経関節機能障害へのアプローチ後、問診時から「脳の学習記憶」による問題が疑われたので心身条件反射療法(以降PCRT)にてエネルギーブロック(以降EB)をチェック。セルフイメージ(症状のある自分を客観的映像的イメージ+聴覚情報「治るのに時間がかかるだろうな」)にてEB確認(陳述記憶)。PCRT調整。

・3回目  
前回までの施術にて、硬いものを食べた事により酷くなった痛み、つまり主訴に関してはほぼOKとなる。後は元々あった自転車事故後継続していた左顎開けきつたときの痛みとカクツという感覚だけとなる。AMにて神経関節機能障害改善後、PCRTにて自転車事故前後の状況を時系列に沿ってEB反応をチェック。事故後朝起きた時の自分の顔を見たシーンにて陽性反応。PCRT調整。

・4回目  
AMアプローチ後、PCRTにて感情面を検査。「連帯感」にて陽性。患者さまも思い当たる事あり。左肺の経絡EBと併せPCRT調整。

・5回目  
左顎開けきろうとしたときに少しだけカクツという感覚と少々痛みが残るが調子は良い。AMアプローチ後、PCRTにて事故時の「学習記憶」をチェック。以下の2つの陽性反応。  
・自転車で転んだシーン(出来事記憶、映像的記憶)  
・事故で痛めたしずつとだからカクツとするのは仕方ない(意味記憶、言語的

## 記憶)

PCRT調整。

## ・6回目

痛みは全くなく顎の調子は非常に良い。硬いものや口を大きく開けた時にカクツという感覚が本当にたまに出ることがあるけど気にならないレベルにまで改善。

## 【考察】

側頭下顎関節に関係する不調全般が実質的に顎関節症と表現され、はっきりとした原因は知られていない。生活習慣や肉体的精神的ストレスなど様々な要因が絡み合って発症すると考えられている。

今回は、自転車事故と硬いものを噛んだ時の衝撃というどちらも外傷に起因して発症したケースでは通常このようなケースでは通常顎関節の構造的異常に注目されるが、外傷を起因とするケースにおいても明らかに顎関節の異常が認められない例も多々存在する。今回は明らかな異常はなく治療にはいたらなかった。

一般的には病気や健康を考えるとあたり、目で見えて確認できる構造異常にばかり原因を求める傾向がある。もちろん構造的な問題を検査する事もとても大切である。そこから健康を取り戻す患者さまも多くいらつしやる。

しかし、目で確認できる構造異常だけに原因があるとは限らない。目では確認できない機能的な問題や生体的エネルギー的な問題もかなりの割合で存在する。今回の症例においても、まずAMによる機能障害の改善から良い結果につながった。更に今回非常に顕著に

効果があったと感じたのは

2回目、5回目の「脳の学習記憶」(脳の可塑性)に対するアプローチだった。記憶は大きく「短期記憶」と「長期記憶」に分けられる。更に長期記憶は「非陳述記憶」と「陳述記憶」に分けられ、頭で覚える陳述記憶は「出来事記憶」と「意味記憶」に分類される。(図を参照)

2回目のセルフイメージ調整後の改善。更に5回目の「自転車事故で顎を痛めた」という出来事記憶と、事故で痛めその後の長年の経験から意味づけされた「カクツとするのは仕方ない」という思い込みのPCRT調整後の変化は著しいものだった。

特に患者さまの訴える「カクツという感覚や音」に関しては、既に長年に渡り抱え続けた問題であるため、構造的にも関節円板や韧带などの変成や癒着などによる影響が多々考えられる状況。その中で構造的なアプローチなしの「学習記憶」による調整のみでこのまでの改善がみられるという点で、構造的な観点からだけでなく機能的エネルギー的な観点からも見ることが非常に大切であるという事を改めて考えさせられた症例であった。

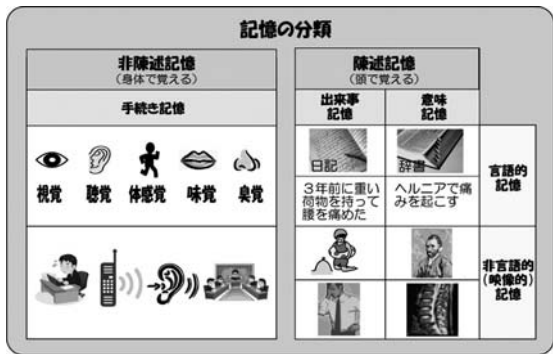


図 PCRT研究会テキストより引用